「緊急人道支援研究」発刊に寄せて

会長　山田 満

このたび、当学会においてもジャーナルの発行が始まります。本号はその記念すべき第一号となります。当学会はご存知の通り、昨今の緊急人道支援が喫緊の課題となっている中で、2023年9月12日に近畿大学で創設記念集会、2024年2月13日に第一回大会を東京大学で開催し、本年2025年2月1日に第二回大会を早稲田大学で開催したばかりのまだ誕生して間もない学会です。とはいえ、学会が取り組む課題の重要性は年々高まっており、大会への参加者数も増大しております。

当学会はホームページに掲載されている通り、紛争や自然災害に関わる諸問題を研究する学術研究者と実際の現場でこれら諸問題解決に従事する実務者の問題意識の融合を目指しております。要するに、実務者からは現実に抱える問題を提起してもらい、その一方で研究者はそれら問題を学問上の政策課題として議論をするという、両者による知のプラットフォームの形成を目指しております。

人道支援に従事するステークホルダーは幅広く、第二回までの大会のプログラムを振り返ってみても、NGO、医療関係者、国際機関関係者、メディア、企業・団体、研究機関、政府関係機関等から参加者を得て、現代の国際社会が抱える喫緊の課題となっている人道支援に対し、直接間接的に向き合っている方々の様々な側面からの問題提起がなされていることがわかります。これらの問題提起は、学会として参加する学術研究者等への研究課題の提供となり、両者は互いの経験や知見を学会という場で共有し、人道支援の空間を拡大していくことにつながっております。

また同時に、緊急アピールや政策提言として内外の様々な公的私的機関に対して具体的な形を示すことで人道支援のあり方に関するオールタナティブな提起、さらには改善を求めることにつながっています。学会としては全国大会とは別に特別シ

ンポジウムも随時開催しております。例えば、「パレスチナ・イスラエル情勢から考える人道支援〜今、何が起きているのか。私たちができることは何か〜」を開催しました。このシンポジウムでは、研究者の分析と同時に、NGOとして当地で長年従事してきた実践者の経験の報告を受けて互いの知見と経験を融合させ、内外に向けて学会としての提言を行なう貴重な機会を持つこともできました。

本学会は、すでに述べたように人道支援に従事する様々なステークホルダーによる知のネットワークを目指しています。本年2025年2月の全国大会では、緊急人道支援に関わる従事者の報告のみならず、若い世代の挑戦や役割にも焦点を当てた大会内容を企画しました。開催校であった早稲田大学には平山郁夫記念ボランティアセンターがあり、早稲田大学学生のボランティア活動のハブとして、学生時代に多くの社会貢献を行う場、それを考える場を提供しています。

学会としても次世代を担う若い世代の緊急人道支援の役割を期待しており、緊急人道支援入門講座を5回にわたって開講しました。講師陣は、長年国際協力の現場で従事してきたNGO職員、国連職員、現在は研究者として実務と研究の架橋を担っている方々にお願いしました。この企画も時宜を得た内容となり、各大学のボランティア活動に実際に従事している学生やこれから踏み出そうとしている若い世代への後押しとなった企画だったと思います。

今回の第2回全国大会でも引き続き、ユースセッションとして「大学生や大学は緊急人道危機に対して何ができるのか」をテーマに自らのボランティア経験を語ってもらい、すでに多くの経験や知見を有する先輩従事者から貴重な助言を得ることができました。午後のオープニングシンポジウムでは、ウクライナ支援のために隣国のポーランドで緊急人道支援に従事した大学院生の報告、紛争国の若者が過激派集団から離脱する支援を行う若手NGO代表の報告とともに、長年国連世界食糧計画に務め、緊急人道支援に熟知している方にも参加いただき、若い世代やNGOの役割に関する助言をいただきました。今後とも学会の重要な取り組みの一つとして、緊急人道支援におけるユースへの働きかけを続けながら、学会にユース部門を設立することも考えています。この点は、他の学会にはない試みで当学会の特徴とも言えます。

さて、最後に「緊急人道支援研究」創刊号を概観してみたいと思います。当然ながら、再三の繰り返しになりますが、研究者と実務者がそれぞれの立場からの緊急人道支援に対する貴重な問題提起をおこなっているとともに、政策提言等がなされています。今回は創刊号であったことで少し広報が遅れたこともあってか、少なめの2本の玉稿の掲載となってはいますが、とはいえ本学会誌の意図を反映した内容のものと考えます。

榎木美樹氏は長年インドなどの南アジアの地域を中心に研究をされており、多くの論考を発表しています。様々な研究機関等でのご経験を踏まえて、今回はインドにおけるチベット難民に関する玉稿を寄稿しておられます。同様に、三宅隆史氏も長年シャンティ国際ボランティ会で図書館活動を展開されており、その後大学教員として社会教育等の研究指導もされており、実務経験を背景にした論文を寄稿されています。いずれも本学会誌が意図する内容を反映しており、読者には多くの示唆を提供していることでしょう。次の第2号には、より多くの会員からの投稿を期待したいです。